

おとさだ
乙 貞

第 206 号 通巻 36 巻 第 3 号
平成 27 (2015) 年 8 月 1 日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
TEL/FAX 077-585-4397

〒524-0212
守山市服部町 2 2 5 0 番地

日差しが強くなり、夏もいよいよ本番といった暑い日々が続いております。夏といえ
ば様々な行楽が思い当たりますが、海水浴などその代表格ではないでしょうか。今では
当然になった海水浴ですが、その歴史は浅く明治時代が始まりと言われてい

それまで基本的に海は漁民たちの生活の場であり、江戸時代には鎖国政策もあって海
は近寄りがたいものとする風潮が強かったのです。海に入る行為としては穢れを清める
儀式としての「水垢離^{みずごり}」や祭礼の一環として神輿^{かみしょうぎょ}を担いで海に入る「海上渡御」などの
宗教的儀式としてのものか、病気の者が海水を浴びて治療をしようと試みる「汐湯治^{しおとうじ}」
など医療目的のもので、行楽として海に入ることはありませんでした。

海水浴の本格的な導入に大きな影響を与えたのが、「日本近代医学の父」と呼ばれるド
イツ人医師エルウィン・フォン・ベルツ (1849-1913) で、明治八年 (1875) に東
京医学校 (後の東大医学部) 講師として招かれ、風土病予防に推奨したのだと言われて
います。我々に身近な海水浴も本来は別の意味があったことはおもしろく感じますね。

そんな夏の調査成果、活動報告をご紹介します。

発掘調査だより

吉身西遺跡の発掘調査

宅地造成に先立ち、5月初頭より行ってきました調査は6月19日に終了しました。
調査の結果、縄文時代後期の溝1条 (SD-1)、弥生時代後期の方形周溝墓1基 (SX
-1) と、弥生時代後期から古墳時代前期の溝2条 (SD-2、SD-3) を検出しまし
た。

SD-1 は、調査区の南端部において東西方向に伸びており、幅約4m、深さ50cm
を測ります。縄文土器も少量出土しており、同時期の流路と思われます。

SX-1 は、コーナー部の一部を含んで検出しています。出土土器から、上記の時代の
溝と見られます。幅1.5m~2.5m、コーナー部は狭くなっています。深さは約70cm
を測ります。北溝の溝底からは壺^{かめ}、甕が出土していて供献土器と思われます。

SD-2 は、南東から北西にかけて流れ、幅4m、深さ120cmを測ります。溝の西
端からは土器と木器、網代が出土しています。

SD-3 は、SD-2 を切るように東西かけて検出し、幅2m、深さ60mを測ります。
そのことからSD-2以降の溝と考えられます。

周辺の調査では方形周溝墓が検出されており、今回の調査区においても広がっていることが判りました。



▲方形周溝墓 (SX-1) 近景 西側から

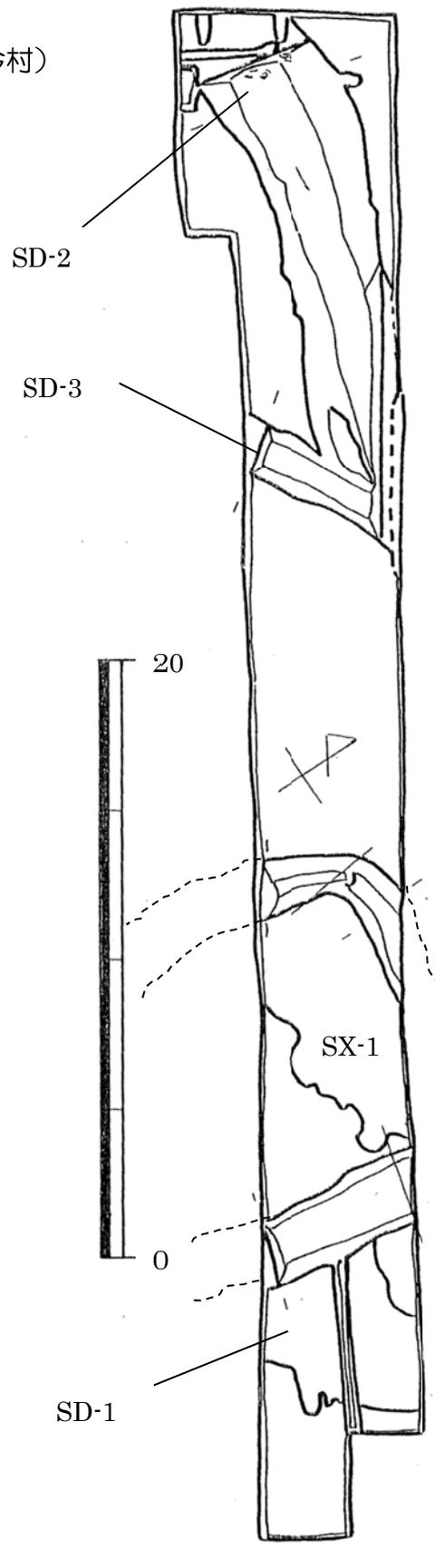


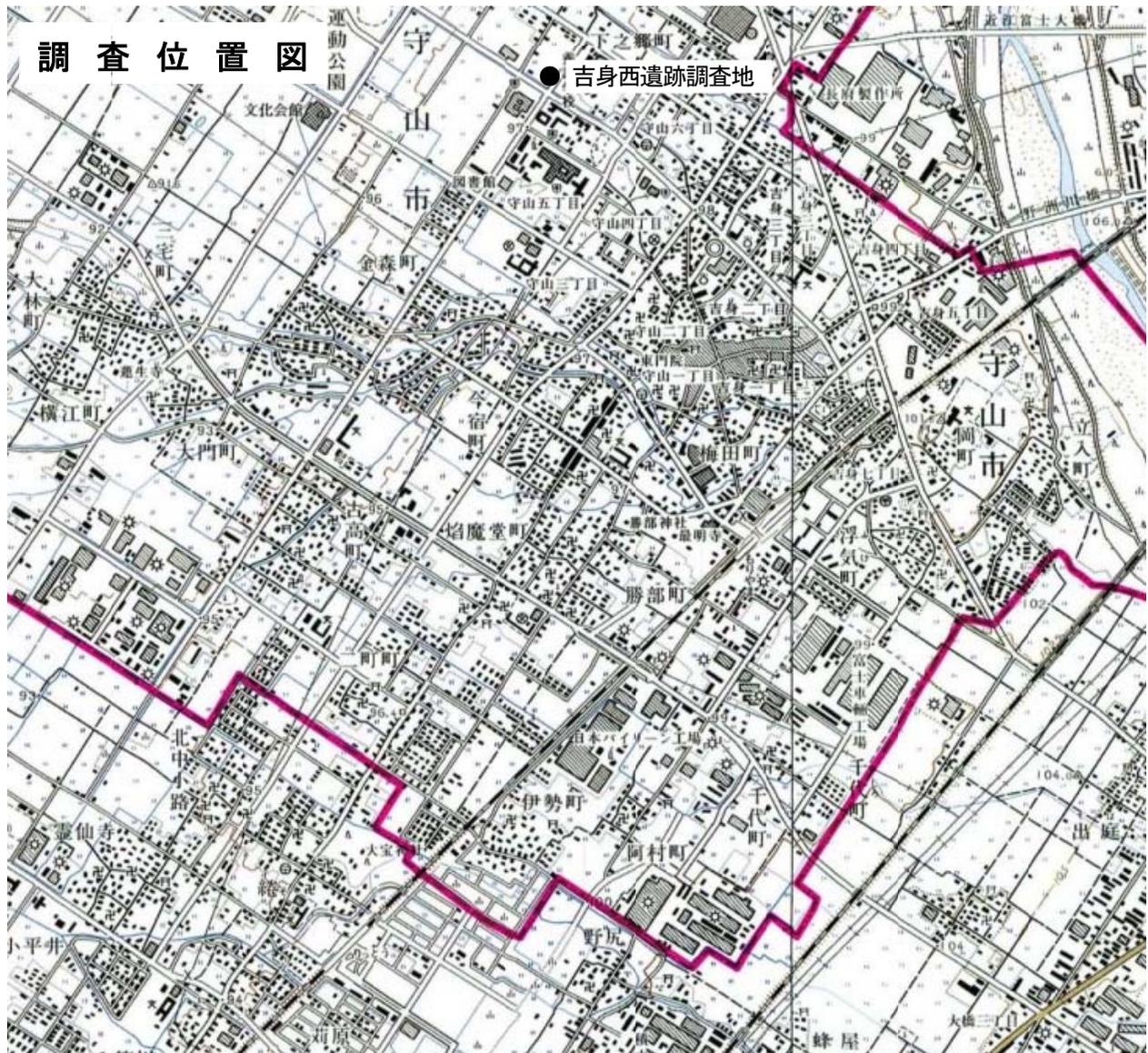
▲調査区域写真 SD-1・SD-2 東側か



▲SX-1 から出土した供献土器

(今村)





トピックス

下之郷GOキッズが体験学習に訪れました！

7月9日（土）、下之郷史跡公園を拠点に活動する下之郷GOキッズが体験学習に訪れました。

下之郷GOキッズは様々な体験を通して、下之郷遺跡、弥生人の暮らしを学び、地域の人々に情報発信する活動を行っています。

今回は活動の拠点である下之郷史跡公園を離れ、当センターで、フナずしづくりや石包丁づくりなどを体験しました。参加した14名のメンバーは初めての体験に興味津々でした。



▲ 鮎鮓作り体験

埋蔵文化財センター友の会だより

友の会第2回見学会を開催しました！

7月10日（日）当センター友の会見学会を開催しました。

今回の見学は「古の南山城を巡る」というテーマで奈良に近い木津川市に点在する上人ヶ原遺跡公園（国史跡）、石のカラト古墳（国史跡）、山城郷土資料館、くに恭仁京跡（国史跡）を見学しました。

前日が豪雨だったこともあって、非常に蒸し暑い一日となりましたが、参加会員23名は夏の南山城を満喫していました。なお、今回の見学会では、京都府立山城郷土資料館の横出課長さん、松尾さんに解説をしていただき、大変お世話になりました。

次回友の会見学会は九月下旬開催予定です。ぜひまたふるってご参加下さい。



▲恭仁京跡 見学風景



▲山城郷土資料館 見学風景

【後記】

最初に夏の風物詩として海水浴を挙げましたが、花火もその一つではないでしょうか。昨今ではあまり叫ばれなくなった「たまや〜かぎや〜」という掛け声、これは花火師の屋号であることは御存知のかたも多いかと思えます。さてこの玉屋と鍵屋ですが、鍵屋が信仰していたお稲荷さんが啜っていた「鍵」と「玉」から来ています。鍵屋が信仰しているのに玉屋はなぜ屋号に持って来たの？と思われるかもしれません。実はこの玉屋、鍵屋の手代である稀代の花火師が暖簾分けしてもらって誕生しました。そしていつしか鍵屋を凌ぎ、隅田川花火では先に玉屋の名が呼ばれることになりました。しかし玉屋は次第に奢るようになり、火薬の取り扱いをしくじり大火事を起こし、一代限りで潰してしまいます。一方の鍵屋、連綿と続き現在でも東京で営業されているのです。

潰してしまった玉屋ですが、私が調べたところによると、主人はかなりクリエイティブな人で、当時「白」発色しかしない花火を良しとせず鉄粉や硫黄を使い「緑」を試みたり、群馬産の鉱物を使った「赤」に挑戦しています。楽しむことと安全を両立をさせなければいけないと思わされる内容でした。先人たちが工夫した花火。夏の夜空を眺めながら、安全で楽しい夏をお過ごし下さい。

（今村）